

咸臨丸

絆を確認 新たな船出



終焉140周年記念式典

全国の関係者集いサミット

【木古内】幕末の軍艦「咸臨（かんりん）丸」が木古内町のサラキ岬沖で座礁、沈没してから140周年を迎えたことを記念したイベントが24日、同町で開幕した。記念式典や同艦にゆかりのある全国各地の自治体から関係者を招いた「咸臨丸全国まちづくりサミット」を開催。参加者は沖合に今なお眠る同艦へ思いをはせるとともに、歴史的な価値を全国に発信し関係団体同士の絆を深めることを確認し合った。（松宮一郎）

イベントは、同艦をまちづくりに結びつけようと活動する住民団体「咸臨丸とサラキ岬に夢見る会」などの主催。同艦の歴史的な価値の見直しのほか、節目の年に関係地域との縁をさらに強めようという計

画した。

式典はサラキ岬で行われ、来賓を含め約250人が参加。花火12発の追悼砲や献花で同艦をしのいだ。同会の久保義則会長が「これからも咸臨丸の歴史性とサラキ岬の豊かな自然を生かした拠点作りを取り組んでいきたい」と式辞を述べた。建造国のオランダからは駐日大使館のバス・ヴァルクス文化・報道官が来町。「きょうみなさんが集まったのは出港の準備のため。もう一度、咸臨丸に乗り込もう」とあいさつした。

25日は午後1時半から町民手作りの朗読劇「永久（とこしえ）に、咸臨丸」の公演がある。入場無料。

最後に、関係地域が文化や人の相互交流を促進することやサミットの継続開催、同艦の歴史の調査を行うことなどを盛り込んだ共同宣言文を採択。参加者らは「同艦を縁とし、新たな航海に出よう」と会議を結んだ。

船舶犠牲者の碑を建立

函館空襲を記録する会

称名寺で除幕式

1945年7月14、15日の北海道空襲で犠牲となった軍艦など船舶の乗組員らを追悼する碑が完成し、建立された函館市船見町の称名寺（須藤隆仙住職）で24日、碑の除幕式が行われた。参列した犠牲者の遺族らは焼香して故人をしのび、平和への誓いを新たにした。

函館として船で犠牲となった多くの戦死者を悼もうと、碑は「北海道空襲による津軽海峡、噴火湾、陸奥湾、船舶犠牲者の碑」と命名。同寺にある「第二次世界大戦函館空襲被災地被災者慰霊碑」の英訳が書かれた碑の裏側に新たに建立した。

「函館空襲を記録する会」（浅利政俊代表）が、港町・

浅利代表は1961年から進めてきた函館空襲に関する文献や現地の調査で、少なく